

キャン施行。30 分頃より嚢胞内に RI の出現を認め、3 時間後で嚢胞内貯溜明瞭となり、5 時間後でも嚢胞内に残存を認め、外傷性ビリオーマと診断した。ピリスコピンを用いて CT 再検したが、嚢胞内の CT 値は不変で嚢胞への造影剤の漏出は明らかでなかった。ビリオーマの診断には胆道スキャンが有力と考えられたが、黄疸の強い症例では確証困難と思われた。

14. 前立腺癌骨転移検索時の腎 RI アンギオグラフィの意義

吉岡 清郎 山田 健嗣 福田 寛
(東北大・抗研・放)
木村 律子 (南町クリニック)

前立腺癌は転移性骨病変の発症率が高い疾患である。一方、骨転移検索によく使用される ^{99m}Tc -MDP, HMDP はリン酸化合物であり腎排泄される。前立腺癌による尿路通過障害の腎への影響は予測されるところであり、前立腺癌骨転移検索を目的とした骨シンチグラフィの RI 投与時に、腎 RI アンギオグラフィを積極的に行ってきた。この場合の腎 RI アンギオグラフィは付加検査であり、日常検査への影響等を考え約 10 分の検査時間で終了するように配慮した。この時間内での腎 RI アンギオグラムおよびガンマカメラレノグラムで、尿流障害による腎機能の障害を高感度に検出し得ること、前立腺癌でよく出現する瀰漫性骨転移の診断に有効な付加情報を得ることができることが確認できた。

15. 褐色細胞腫骨転移の骨シンチグラフィ

丸岡 伸 木下 俊文 坂本 澄彦
(東北大・放)
中村 護 (国立仙台病院・放)

褐色細胞腫骨転移症例 4 例について、骨シンチグラフィ像を X 線像と比較検討した。内訳は男性 3 例、女性 1 例、手術時年齢は 28-33 歳 (平均 31 歳)、原発部位は副腎 2 例、副腎外 (後腹膜) 2 例である。術後骨転移出現までの期間は 1 年 2 か月-9 年 (平均 4 年) で、多発性 3 例、単発性 (胸骨) 1 例であった。骨シンチ上での転移部位は、脊椎 3 例 (10 部位)、骨盤 3 例 (7)、肋骨 2 例 (4)、胸骨 2 例 (3)、肩甲骨 2 例 (2)、大腿骨 2 例 (2)、脛骨 1 例 (1)、上

顎骨 1 例 (1) の計 30 部位で、集積像 21 部位、集積欠損像 9 部位であった。X 線検査では主に骨溶解像を呈し、明らかな骨硬化像は認められなかった。悪性褐色細胞腫の骨転移検索の際には骨シンチ上欠損像を呈することや単発性の場合もあることを考慮すべきであると思われた。

16. 外傷性大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ

丸岡 伸 木下 俊文 坂本 澄彦
(東北大・放)
中村 護 (国立仙台病院・放)

外傷性大腿骨頭部骨折や脱臼後の大腿骨頭壊死の骨シンチグラフィ像について検討した。対象は外傷性大腿骨頭部骨折や外傷性股関節脱臼後に大腿骨頭壊死が疑われ 1985 年以降に当科で骨シンチを施行した 27 例 (男性 13 例、女性 14 例、年齢 9-80 歳、平均 42.5 歳) である。受傷から骨シンチまでの期間は 8 日-9 年 9 か月であるが、2 年以内が 25 例でその平均は 6.9 か月であった。13 例では hot であったが、残り 14 例には low uptake area が認められ、うち 7 例には明瞭な “cold” area が認められた。“cold” area は Garden 分類の Stage III, IV の大腿骨頭部骨折に認められ、経過を追った 5 例中 2 例で “cold” area の縮小を認めた。骨シンチグラフィは外傷性大腿骨頭壊死の診断ならびに経過観察に有用であると思われた。

17. 両側腎動脈狭窄を伴う腎血管性高血圧症の captopril 負荷レノグラフィの分析——レノグラムパターンの変化は何に依存するのか? ——

伊藤 和夫 塚本江利子 永尾 一彦
鐘ヶ江香久子 中駄 邦博 古舘 正從
(北大・核)

Captopril 負荷レノグラフィ (CPRG) を施行し、血管造影および治療後の経過観察から両腎性動脈狭窄 (BRAS) を伴った腎血管性高血圧 (RVH) と確定された 8 症例について、レノグラムパターンと腎摂取率との関係について retrospective に検討した。

定量的および定性的評価で陽性となった症例では虚血腎の腎摂取率に有意差は見られなかったが、captopril 負荷後、腎摂取率が -40% 以下に低下する虚血腎ではレノグラムパターンが閉塞あるいは無機能型に変化する結果となった。BRAS 群では CPRG の評価に関して様々